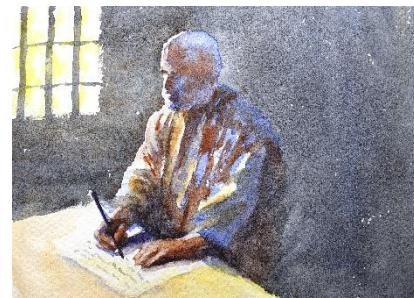


ピリピ人への手紙の概論として歴史的背景をバイブルエフェクトのYouTubeで見てください。

さんこう YouTube ピリピ人への手紙の歴史的背景 バイブルエフェクトより  
[https://www.youtube.com/watch?v=5Pj\\_vYe\\_ELg](https://www.youtube.com/watch?v=5Pj_vYe_ELg)

## <ピリピ人の手紙について>

ピリピ人への手紙はパウロがローマに一回目に投獄されて2年間、牢獄にいた間に書かれた書簡の1つです。獄中書簡と言われる「エペソ人への手紙」「ピリピ人への手紙」「コロサイ人への手紙」「ピレモンへの手紙」の中で、最後に書かれた書簡（手紙）です。ピリピ教会の設立と働きの内容は、使徒16章を参考にしてください。簡単に紹介します。（特に、使徒16:9-15を見てください）



パウロが第二次宣教旅行に行ったとき、アジア地域に行こうとしていたのですが、マケドニアに行くようにという幻を見ます。そこで、トロアスからピリピに行くことになりました。ピリピは、マケドニア地方で重要な都市で、ローマの植民地でした。このピリピでパウロ一行が福音を伝えるとき、すでに神様に仕えていたリディア（ルデヤ）という人が、パウロ一行を自分の家に招待します。それがピリピ教会になりました。その後、占いの霊につかれた女奴隷を癒やし、そのことゆえに、むち打たれて、牢獄に閉じ込められましたが、そこを守っていた看守とその家族すべてが福音を聞き、神様を信じるようになりました。そのような特別なことがあったからなのか、ピリピ教会はパウロを特別に愛していて、パウロの必要すべてを支援しました。そして10年後にパウロがローマの牢獄に投獄されたという知らせを聞いて、ピリピ教会の信徒たちは、経済的に苦しい状況だったので献金を集めて、エパフロディトを通して渡したのです。そのときパウロは、ピリピ教会の状況をエパフロディトの話で聞くようになりました。そこで、それをたたえ、慰め、愛の手紙を書いてエパフロディトに持たせて送ったのがピリピ人への手紙です。

このピリピ人への手紙は、4章だけの短い書簡です。10～15分で読めると思います。全体を理解するために、みなさんが必ず読んでください。

こんげつ がくいんふくいんか か なか で くる くなん  
今月の学院福音化の4課の中ですべて出て来るのが「**苦しみ（苦難）**」です。それゆえ、今月は苦しみ（苦難）について、その内容を黙想したいと思います。

# 1課「苦しみを受ける信徒の確信」

ピリピ 1:9-11

09 私<sup>わたし</sup>はこう祈<sup>いの</sup>っています。あなたがたの愛<sup>あい</sup>が、知識<sup>ちしき</sup>とあらゆる識別力<sup>しきべつりょく</sup>によって、いよいよ豊<sup>ゆた</sup>かになり、

10 あなたがたが、大切な<sup>たいせつ</sup>ことを見分けることができますように。こうしてあなたがたが、キリストの日に備<sup>ひ</sup>えて、純真<sup>そな</sup>で非難<sup>じゆんしん</sup>されるところのない者<sup>もの</sup>となり、

11 イエス・キリストによって与<sup>あた</sup>えられる義<sup>ぎ</sup>の実に満<sup>み</sup>たされて、神の栄光<sup>かみ</sup>と誉<sup>えいこう</sup>れが現<sup>ほま</sup>されますように。

神様<sup>かみさま</sup>は、はじめから福音<sup>ふくいん</sup>を約束<sup>やくそく</sup>してくださいました。原始福音<sup>げんしふくいん</sup>と言われる創世記3:15の女<sup>い</sup>の子孫<sup>そうせいき</sup>から始まり、箱舟<sup>おんな</sup>、犠牲<sup>しそん</sup>のいけにえ、過越<sup>すぎこし</sup>の子羊<sup>こひつじ</sup>、インマヌエル<sup>いんまぬえ</sup>で予表<sup>よひょう</sup>された、そのみことばの実体<sup>じつたい</sup>として来<sup>こ</sup>られたイエス・キリストが、その福音<sup>ふくいん</sup>の主人公<sup>しゅじんこう</sup>です。そのようにして、この地<sup>ち</sup>にまことの光<sup>ひかり</sup>、いのちの光<sup>ひかり</sup>として来<sup>こ</sup>られたイエス・キリストを、だれも知らず、だれも受け入れなかつたと、ヨハネ1章<sup>しょう</sup>に書いてあります。そのようにねんかん<sup>ねんかん</sup>したイエス・キリストの人生<sup>じんせい</sup>と働き<sup>はたら</sup>きは、苦し<sup>くる</sup>み(苦難<sup>くなん</sup>)と迫害<sup>はくがい</sup>と患難<sup>かんなん</sup>の連続<sup>れんぞく</sup>でした。結局<sup>けつぎ</sup>、メシア<sup>めしあ</sup>を待ち<sup>まち</sup>に待<sup>まち</sup>っていたユダヤ人<sup>じゆだやじん</sup>、すなわち、ご自分<sup>ごじぶん</sup>の民<sup>たみ</sup>によって、十字架<sup>じゆうじか</sup>にかけられ殺<sup>ころ</sup>されたのでした。そして、復活<sup>ふっかつ</sup>されたイエス様<sup>イエスさま</sup>が弟子<sup>でし</sup>たちに現<sup>あらわ</sup>れて語<sup>かた</sup>られたみことばは「平安<sup>へいあん</sup>があなたがたにあるように。父<sup>ちち</sup>がわたしを遣<sup>つか</sup>わされたように、わたしもあなたがたを遣<sup>つか</sup>わします。」(ヨハネ 20:21) でした。

神様<sup>かみさま</sup>はイエス様<sup>イエスさま</sup>をこの地<sup>ち</sup>に平和<sup>へいわ</sup>の王<sup>おう</sup>として送<sup>おく</sup>ってくださいました。その平和<sup>へいわ</sup>の王<sup>おう</sup>は、十字架<sup>じゆうじか</sup>にかけられて死ぬ<sup>し</sup>ために来<sup>こ</sup>られたのです。そのようなイエス様<sup>イエスさま</sup>が弟子<sup>でし</sup>たちをこの地<sup>ち</sup>に遣<sup>つか</sup>わされるということです。「父<sup>ちち</sup>がわたしを(死<sup>し</sup>になさいと)遣<sup>つか</sup>わされたように、わたしもあなたがたを(死<sup>し</sup>になさいと)遣<sup>つか</sup>わします」ということです。

他<sup>ほか</sup>のところで、弟子<sup>でし</sup>たちを二人<sup>ふたり</sup>ずつ現場<sup>げんば</sup>に送<sup>おく</sup>られたときも、「わたしは狼<sup>おおかみ</sup>の中に羊<sup>なま</sup>を送<sup>ひつじ</sup>り出すようにして、あなたがたを遣<sup>つか</sup>わします」(マタイ 10:16) と言<sup>い</sup>われました。それは、「あなたがたは羊<sup>ひつじ</sup>だけれど、狼<sup>おおかみ</sup>の中<sup>なか</sup>に入<sup>はい</sup>って戦<sup>たたか</sup>って勝<sup>か</sup>ちなさい」ということではないでしょう。「行<sup>い</sup>って食<sup>く</sup>われなさい」ということでしょう。

## 1. 神様<sup>かみさま</sup>の始<sup>はじめ</sup>まり

パウロ<sup>パウロ</sup>がエパフロディト<sup>エパフロディト</sup>を通して、ピリピ教会<sup>ピリピ教会</sup>の中<sup>なか</sup>に紛争<sup>ぶんそう</sup>、分裂<sup>ぶんれつ</sup>があること、そして、ユダヤ教<sup>きょう</sup>の偽<sup>いつわ</sup>りの教え<sup>おし</sup>があることを聞<sup>き</sup>きました。しかし、パウロは神様<sup>かみさま</sup>にほんとうに感謝<sup>かんしゃ</sup>して、ピリピ教会<sup>ピリピ教会</sup>の信徒<sup>しんと</sup>たちを思<sup>おも</sup>い起<sup>おこ</sup>すたびに喜<sup>よろこ</sup>びの中<sup>なか</sup>で祈<sup>いの</sup>っているとイ<sup>い</sup>います。

1:3 私<sup>わたし</sup>は、あなたがたのことを思<sup>おも</sup>うたびに、私<sup>わたし</sup>の神<sup>かみ</sup>に感謝<sup>かんしゃ</sup>しています。

1:4 あなたがたすべてのために祈<sup>いの</sup>るたびに、いつも喜<sup>よろこ</sup>びをもつて祈<sup>いの</sup>り、

その理由が5節からです。

1:5 あなたがたが最初の日から今日まで、福音を伝えることにともに携わってきたことを感謝しています。

1:6 あなたがたの間で良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださると、私は確信しています。

ここで言われている、神様が始められた「良い働き」とは何でしょうか。奉仕、救済でしょうか。ちがうでしょう。イエス・キリストを通して救いの働きのことです。それは、十字架を通して完成された働きです。ですから、ピリピ教会の信徒にいろいろな問題や事件があることは、それはむしろキリストの苦しみ(苦難)に預かることになり、神様がなさる働きに器として用いられることだと、期待と感謝がパウロにはあふれていたのです。

それゆえ、1:29-30のようなアドバイスもすることができたのです。

1:29-30

29 あなたがたがキリストのために受けた恵みは、キリストを信じるだけでなく、キリストのために苦しむことでもあるのです。

30 かつて私について見て、今また私について聞いているのと同じ苦闘を、あなたがたは経験しているのです。

神様の福音を伝えるための始まりは、神様の救いの働きを成し遂げるために、苦しみ(苦難)もともに預かることが始まりだということです。

## 2. 神様の計画

パウロが投獄されていることで、パウロのことを心配しているピリピ教会の信徒に向かって、これも神様が計画されたことで、神様の働きだと言っています。

ピリピ 1:12-14

12 さて、兄弟たち。私の身に起こったことが、かえって福音の前進に役立ったことを知ってほしいのです。

13 私がキリストのゆえに投獄されていることが、親衛隊の全員と、ほかのすべての人たちに明らかになり、

14 兄弟たちの大多数は、私が投獄されたことで、主にあって確信を与えられ、恐れることなく、ますます大胆にみことばを語るようになりました。

パウロが投獄されたことで、牢屋の外でいろいろな人が、いろんなかたちで、いろいろな動機を持ってキリストを伝えているので、すべてのことを喜んでいとパウロは告白しています。

## ピリピ 1:15-18

15 人々の中には、ねたみや争いからキリストを宣べ伝える者もありますが、善意からする者もいます。

16 ある人たちは、私が福音を弁証するために立てられていることを知り、愛をもってキリストを伝えていますが、

17 ほかの人たちは党派心からキリストを宣べ伝えており、純粋な動機からではありません。鎖につながれている私をさらに苦しめるつもりなのです。

18 しかし、それが何だというのでしょうか。見せかけであれ、真実であれ、あらゆる仕方でキリストが宣べ伝えられているのですから、私はそのことを喜んでいきます。そうです。これからも喜んでいきましょう。

伝道は方法ではありません。神様がなさることです。しかし、私たちは伝道するときに「私が正しい」「あなたが正しい」「なぜあなたはそのように伝えるのか」という争いをして、問題になることもあります。

たとえば、私は穏やかに話します。伝道師をしていたとき、伝道キャンプに行くと、他の教会の私より年上の女の伝道師さんがいました。私に先に伝道してくださいと言われたので、お店に入って、店のご主人に福音を伝えましたが、そのご主人は受け入れませんでした。お店から出て来たときに、その女の伝道師さんが「なんで、そのように穏やかにやさしく福音を伝えるのですか。そのように伝えては福音は伝わらないですよ」と言いました。心の中で「要らないお世話だな」と思いました。

パウロは、牢屋の外に起こっているすべてのことも、結局、神様の計画で神様がなさっていることだと見たのです。結局、それはキリストが宣べ伝えられることだからと言います。神様が神様の働きをなさるのです。

### 3. パウロの願い

クリスチャンの願いは、不確実な未来に対する、あいまいな願いではありません。明らかな約束の中から出て来る確信であるべきです。パウロはダマスコで復活されたイエス・キリストに出会い、そして、アナニアを通して自分が選ばれた器だということを悟ったときから、自分を通して、ただイエス・キリストだけが現れることを願っていました。それが1:20-21です。

20 私の願いは、どんな場合にも恥じることなく、今もいつものように大胆に語り、生きるにしても死ぬにしても、私の身によってキリストがあがめられることです。

21 私にとって生きることはキリスト、死ぬことは益です。

パウロは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受けて、生きる望みさえ失うほどだったと言ったこともありました。死刑の宣告を受けた思いだったと言っています。(Ⅱコリント1章)しかし、そのような苦難が忍耐を生み出し、忍耐は練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すとローマ5章に言っています。(ローマ5:3-5)

最後にパウロが自分が投獄されている状況で、2つの葛藤で祈っていると書いています。投獄が終わって死刑にされても、それはこの世から離れてキリストとともに永遠に生きることになるので、もっと良いことだと知っているけれど、しかし、この地で愛するピリピ教会の信徒と信仰の交わりをするその瞬間も、キリストの中で天国の生活を味わっていることだということです。それゆえ、2つの内でどちらを願うべきなのか、幸せな葛藤の祈りをしていました。

私たちは、この世で楽な生活や、信仰生活が少しうまくいくと、世の中は良いなと思います。そして、少しだけでも問題があると、早くこの地から離れて、神の御元に行きたいと思うのではないのでしょうか。パウロはまったく違いました。

それが、22-26節に書いてあります。

22 しかし、肉体において生きることが続くなら、私の働きが実を結ぶことになるので、どちらを選んだらよいか、私には分かりません。

23 私は、その二つのことの間で板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。そのほうが、はるかに望ましいのです。

24 しかし、この肉体にとどまることが、あなたがたのためにはもっと必要です。

25 このことを確信しているので、あなたがたの信仰の前進と喜びのために、私が生きながらえて、あなたがたすべてとともにいるようになることを知っています。

26 そうなれば、私は再びあなたがたのもとに行けるので、私に関するあなたがたの誇りは、キリスト・イエスにあって増し加わるでしょう。

パウロは、一回目の投獄で無罪となり解放されます。その後、3年後に2回目に投獄され、その2年後ローマ皇帝ネロによって死刑宣告を受けます。

パウロは、キリストの中の苦しみ(苦難)を感謝して、その中で神様がともにおられることをいつも味わっていた人でした。これが私たちの信仰告白になりますように。